

樹形異常の発生について

はじめに

単木シェルターは、狭い空間に苗木を入れて外部からの枝葉食害や剥皮被害からまもり、まっすぐに伸びるように工夫されている。しかし、ヒノキの場合苗木の先端が垂れて成長していくために一部の苗木はシェルターの中でらせん状に成長する場合があります、これを一般的に樹形異常と呼んでいる。

幼齡木ネットについても、一部に樹形異常が見られ対策を行ってきた。しかし、完全に排除することは容易ではない。そこで、樹形異常の発生をできる限り抑えるために、現在施工されている各地で樹形異常の発生率を調査しました。今回は、群馬県にある平成 11 年春に施工された現場の調査報告である。

調査現場全景〔群馬県〕



調査方法

現場は平成 11 年 4 月に幼齡木ネット®を 910 本施工している。1 本ごとに番号をつけ、樹形の状態を

- ① 苗木が正常であるか異常であるか。
- ② 幼齡木ネットを越えて成長しているものそうでないもの
- ③ 異常の苗木の原因追求の 3 種類に区別して調査を行った。



調査現場近景〔群馬県〕

結果と考察

総本数910本		単位:本			
正常	852	93.6%	異常	58	6.3%
【内訳】		【内訳】			
オーバーネット	783	86.0	樹形異常	36	3.9
2m以上成長	420	46.1	下刈り誤伐	12	1.3
			クリップはずれ	10	1.0

2 年半経過した 6 年生の 910 本の幼樹は 93.6% が動物による被害もなく順調に成長している。全体の 86.0% がネットを越えて成長をし、全体の 46.1% が 2m 以上の樹高に達している。

異常が発生した 58 本(6.3%)の原因は、樹形異常が 36 本と最も多く、次に下刈り作業による誤伐 12 本、クリップはずれ 10 本となっている。下刈り作業による誤伐は、10 本が下刈り機械の転回時にラクトロン上部に触れ支柱とネットをきってしまった事故であった。クリップのハズレは、全てが上部で発生しており 2 年半の風雪雨が影響した可能性は排除できないが 910 本中 10 本の発生を考えると取り付け不良の可能性も考えられる。

樹形異常の発生率は 3.9%という結果がでた。この発生率は許容範囲内と判断する。当現場は、幼齡木ネットの取り付けが大変丁寧に施工されており、ネットの取り付けが悪いと樹形異常率は高くなるので、ネットの取り付けを説明書どおり行うことで発生率を低く抑えることができる。

